

● 大木 舞 特定助教

Mai OKI (Program-Specific Assistant Professor)

研究課題：ヒンドゥー教美術における二大神格の融合—ハリハラ神話・図像の形成と発展から探る

初期ヒンドゥー教の諸相

(The Fusion of the Two Principal Deities in Hindu Art: Aspects of Early Hinduism in the Formation and Development of the Harihara Mythology and Iconography)

専門分野：ヒンドゥー教図像学、インド学 (Hindu Iconography, Indology)

受入先部局：文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名：京都大学 (Kyoto University)



インドでは、紀元前に遡るヴェーダの宗教（バラモン教）から一定の要素を受け継ぎつつ、ヴィシュヌやシヴァ、女神等を主要な神格とするヒンドゥー教に対する信仰が活発になり、これらの神々を造形化したヒンドゥー教美術が花開きました。宗教美術というと厳かなイメージがあるかもしれません、ヒンドゥーの神々は踊り、躍動感に満ちた姿で魅せてくれます。私の専門はこのような神々の姿などを把握し、その意味を考えるヒンドゥー教図像学で、主に彫刻の調査のためインドでフィールドワークを行いつつ、関連する文献資料を読み解き研究を進めてきました。本研究では、ヴィシュヌ（ハリ）とシヴァ（ハラ）というヒンドゥー教の二大男性神が融合したハリハラと呼ばれる神格を対象とします。半身がヴィシュヌで半身がシヴァという姿で表現されるというその特異さに着目しながら、ハリハラ神話と図像の形成と発展を追うことで、その背後にある初期ヒンドゥー教の諸相を浮かび上がらせることを目指します。

Hinduism, which worships Viṣṇu, Śiva, and goddesses as its main deities, has been active in India, inheriting some elements from the Vedic religion (Brahmanism), dating back to BCE. I specialize in Hindu iconography, studying the characteristics of these deities and interpreting their meanings. Religious art may often be associated with austere images, but Hindu gods dance and enchant us with their dynamism. I have conducted fieldwork in India, mainly to investigate sculptures while analyzing related literary sources.

My research focuses on Harihara, a fusion of the principal male deities, Viṣṇu (Hari) and Śiva (Hara). The myths of Harihara are found in many texts as well as in artistic and archaeological materials. The figure is represented by a single image of the deity split in half down the middle, with half of the body being Viṣṇu and the other half being Śiva. This study aims to reveal various aspects of early Hinduism by tracing the formation and development of the Harihara iconography and mythology in the ancient Indic world.

ヒンドゥー教研究とハリハラ

ヒンドゥー教は現在インド国内だけでも 11 億人に上る信者を擁する多神教であり、紀元前 1200 年頃に遡るヴェーダの宗教（バラモン教）にその流れを汲む。ヴェーダ文献の時代は祭火と同一視された火神アグニや英雄神インドラ等への崇拜が中心であったが、紀元前後からヴィシュヌとシヴァを最高神とみなす信仰が興隆し、ヴィシュヌ教とシヴァ教はヒンドゥー教の二大潮流を形成するに至っている。初期から中世前期シヴァ教についてはこの 20 年間で新しい文献の研究や校訂テキストの出版が続いており、最新の研究成果に基づき初期

ヴィシュヌ教・シヴァ教研究を刷新するためには、両者の関係性についても新たに見直す必要がある。本研究が対象とするヴィシュヌとシヴァの二大男性神が融合したハリハラは、その神話が複数の文献に見られるだけでなく、彫刻作品などの美術・考古資料にもその姿が残されている。例えば、右半身はシヴァの編み上げた髪型で、右手には三叉戟という典型的なシヴァの持物を持ち、左半身はヴィシュヌの高い冠を被った髪型で、左手には円輪や法螺貝を持つといった姿である（図 1）。二柱の男性神が合体した複合的な図像であり、ヴィシュヌ教とシヴァ教の融合を具現化しているとも



図1：ハリハラ像（ニューデリー国立博物館、筆者撮影）

言え、ハリハラ研究に美術・考古資料からのアプローチという視点は欠かせない。

ヴィシュヌとシヴァ—ヒンドゥー教美術における二大神融合の意義を探る

ハリハラという神格が何故、どのように生まれたのか。ハリハラの起源については未だ纏まった研究がなく、不明な点が多く残されている。ヴィシュヌとシヴァを合体させ、一体の神像を中央で半分に割った特異な図像に至った背後にはどのような思想が存在していたのか。一方の信仰をもう片方に取り込むためという仮説が考えられる。このような二大神融合の意義を追究すべく、本研究はまず、初期のハリハラがどのような神格として成立したのか、古代インドの文献史におけるハリハラ神話の形成と発展を追うことを目標とする。叙事詩文献やプラーナ聖典群などのサンスクリットで著述された文献資料を主に用いるが、ハリハラの最初期の図像は少なくともグプタ朝期（4世紀から6世紀頃）には存在するため、美術・考古資料を併用して、より立体的に初期のハリハラ像を復元することを目指す。ハリハラ神話・図像については共に先行研究の蓄積が浅く、ハリハラという神格そのものが謎に包まれたま

まであるといえ、この状況に一石を投じるべく、基礎的な作業を積み重ねることから始める。

ハリハラの図像については、古代と中世前期の美術・考古資料を対象とし、北インド、デカン高原、南インドのヒンドゥー教寺院遺跡や博物館等で調査を行う。ハリハラ像はインド亜大陸に限らず、東南アジアでも古くから造像が行われており、特に7世紀以降はハリハラ像の建立に言及した複数の碑刻文も残されている（深見2016）。このような碑刻文資料の収集を行い、ハリハラ像の寄進者や制作背景などの情報を集めて、歴史的な視点を取りこぼさないように注意を払う。インド本土のみならず、東南アジアを含めたインド文化圏におけるハリハラ像の変容を追うことで、サンスクリットを媒介とする古典インド文化が南アジアから東南アジアに流入する文化史、並びにヒンドゥー教が伝播・受容されていく宗教史の一端を明らかにする。

宗教美術は概して規範性が強く、ヒンドゥー教美術もその例外ではない。本研究は、特異な姿で表現された図像と、そのような概念、あるいは神話などが如何に誕生したのかという、造像の起源の問題を巡る一つの事例研究となり得る。ハリハラの最大の特徴は、その外観の特殊性にある。ヴィシュヌとシヴァを同一視する発想は、既に叙事詩『マハーバーラタ』に登場しているが（Adiceam 1966）、どの時点から身体を半分ずつ両者に分ける神であるところのハリハラが成立したのかはわかっていない。文献と図像を独立した別個の対象として扱った後に、各々得られた結果を照合し、総合的な考察を行うという方法を用いながら、サンスクリット文化圏におけるハリハラ神話・図像の形成と発展の分析を通じて、ハリハラという神格が初期ヒンドゥー教の文脈においてどのように位置付けられるのかを探っていく。

参考文献

- Adiceam, Marguerite E. [1966] "Les images de Šiva dans l'Inde du Sud [V. Harihara]," *Arts Asiatiques*, tome 13, pp. 83–98, Paris: École française d'Extrême-Orient.
深見純生編著『東南アジア古代史の複合的研究』桃山学院大学総合研究所、大阪、2016年